

大谷 泰志 優秀審査員賞

広島県広島市

大澤 優子

## 赤いお弁当箱

勤めていたころの母は、卵焼きと糸こんにゃくの炒め煮などを朝食の支度とともに手早く作り、ご飯と一緒に赤いお弁当箱に詰めた。「こんなもんでも職場の人とおしゃべりしながら食べたらおいしいんよ。みなが、元気の出る色のお弁当箱じゃねって言うんよ」

お弁当箱を洗いながら母は、華やいだ笑顔を浮かべていた。

父が亡くなり一人暮らしをするようになった母は、そのお弁当箱に手作りのお惣材や炊き込みご飯を詰めて、瀬戸内海を渡って広島我が家を訪れた。私の夫も子どもたちも母の手料理に舌鼓を打った。

「みんなそろって食べたらおいしゅう感じるもんなんよ。一人で食べてもおいしくないんよ」

母はそう言って淋しそうに笑った。

やがて年老いて一人では暮らせなくなった母は、空っぽのお弁当箱とともに広島にやって来た。私は、赤いお弁当箱に母の好物のおうどんや寒天のゼリーを詰めて、老人施設に入所している母のもとに通った。

食事をしたことさえ忘れるようになった母は、赤いお弁当箱を見ると瞳を輝かせた。

「あんたも一緒に食べよ。こんなもんしかないけどな」

母は私の作ったものを自分が作ったものだと思いついで私に進めてくれた。それはそれでささやかな幸せのひとつだったけれど…。

ある日突然意識を失った母は救急病院に搬送され、お弁当箱の中の乳白色のゼリーだけが、ぽっかりと空に浮かぶ雲の切れ端のように取り残されていた。そして母は、お葬儀屋さんが用意してくれた一膳飯と枕団子を携えて、遠いところへ旅立ってしまった。

「一人で食べてもおいしくないんよ」

母の言葉を心の中で何度も繰り返す。私の手元に今も残る赤いお弁当箱に、この次は何を詰めて母に届けようか。眠れない夜に私は一人で考えあぐねている